

ここから 水辺の未来が 動き出す

— 水辺とまちの未来創造メッセージ —



平成26年3月

水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会

目 次

○序 論	・・・ 1		
I. 懇談会で生まれたヒントフレーズ	・・・ 3		
(1) 水辺は猥雑で色気があった。日本の水辺は世界に誇れるものであるはず			
(2) 河川空間は公共空間なのに自由に使えない？			
(3) 水辺を使い倒して、楽しみ倒す			
(4) 地域固有の歴史・文化を活かしつつ、クリエイティブに再生する			
(5) 自分たちで水辺を楽しむ礼儀作法をつくる			
(6) 水辺の利用者、地域住民、行政をつなぐコーディネーターが必要			
(7) 行政は公平、公正、中立の姿勢は重要であるが、新しい提案を受け入れ たりする度量をもつ			
(8) 持続可能性を担保する資金調達や規制緩和のしくみ			
(9) 未来の水辺に向かってつなげる、育てる			
(10) 水辺の使い方に対する共感と実践を広げていくためのプロモーション の方法			
II. 水辺に寄せる思い	・・・ 31		
・陣内 秀信	・井出 玄一	・伊藤 香織	・金井 司
・岸井 隆幸	・忽那 裕樹	・久米 信行	・紫牟田伸子
・田中 義宏	・辻田 昌弘	・遠山 正道	・中島 高志
■参考資料	・・・ 59		
○未来に向けた結び	・・・ 81		

序 論

■原点

世界の都市には、その都市を代表する川や水辺と周辺の街並みが一体となった、美しく風格のある空間が形成されています。（巻末参考資料1、2）日本においても、水辺は古くは万葉の時代に詠まれた和歌や、浮世絵に描かれた江戸の下町と大川（隅田川）のように、積み重ねられた歴史・文化の奥深さとたゆたえ、川そのものが周辺の街並みと融け合っ、地域の代表的な「顔」として美しく風格のある空間を形成していました。（巻末参考資料3）

■荒廃

しかしながら、戦後、高度経済成長等々、治水を中心とした時代の要請に応えるべく水辺は改変され、その一方で、人々の暮らしや街並みは水辺から遠ざかり、かつての地域の「顔」としての美しい姿は喪失してしまいました。多くの日本の都市では、川は効率を重視した排水路と化し、街並みからも背を向けられ、代表的な「顔」としての川や水辺の記憶は徐々に薄れていき、今や絵画や写真でしか見ることは出来ない状況です。（巻末参考資料4）

■萌芽

汚染され悪臭を放った川は、下水道の整備や水質規制といったハードとソフトの両施策により1970年代にはかなり水質が改善されてきました。昭和後期から平成にかけては、「かわまちづくり支援事業」、河川敷地占用許可準則の緩和等（巻末参考資料5）のさらなるハード・ソフト施策の実施により、最近では、民間の開発などにより都市のリノベーションが進められ、各地でシンボルとなるような水辺空間が形成されつつあります。（巻末参考資料6）また、各地で川が持つ豊かな自然や美しい風景を活かして観光により地域振興を図ろうとする動きも活発化してきました。

■再挑戦

2011年の東日本大震災、紀伊半島大水害など防災・減災の重要性は言うまでもなく、公共施設の老朽化対策の重要性も謳われ中、これからは防災と観光、産業、景観、環境など、これらに一体的に取り組み、世界中から人や情報を惹き付ける魅力ある都市の形成が日本のブランド価値を高める最良の手段です。水辺とまちの未来のかたちをデザインし、「つくる」だけでなく「育てる」ことを視野に入れた持続可能な未来の創造が今求められているのです。このたび、水辺、都市のリノベーションに高い関心を持つ、学識者、アーティスト、クリエイター、金融、不動産等々の各界の有識者からなる『水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会』を立ち上げ、未来創造へのヒントをまとめることにしました。（巻末参考資料7）2020年には56年ぶりの東京オリンピック・

パラリンピックの開催が決定しました。国際都市間の競争が激しくなり、日本ブランドを如何にメイキングしていくかがますます重要になってきている中、日本の水辺とまちの未来創造に向けたメッセージを、世界に向けて、そして日本の未来に向けて送ります。

水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会

I. 懇談会で生まれたヒントフレーズ

(1) 水辺は猥雑で色気があった。日本の水辺は世界に誇れるものであるはず

かつて水辺は猥雑で色気があったにもかかわらず、治水重視という時代の要請により水辺は様変わりしていった。しかし、現在でもなお水辺には潜在的に魅力がたくさん詰まっている。

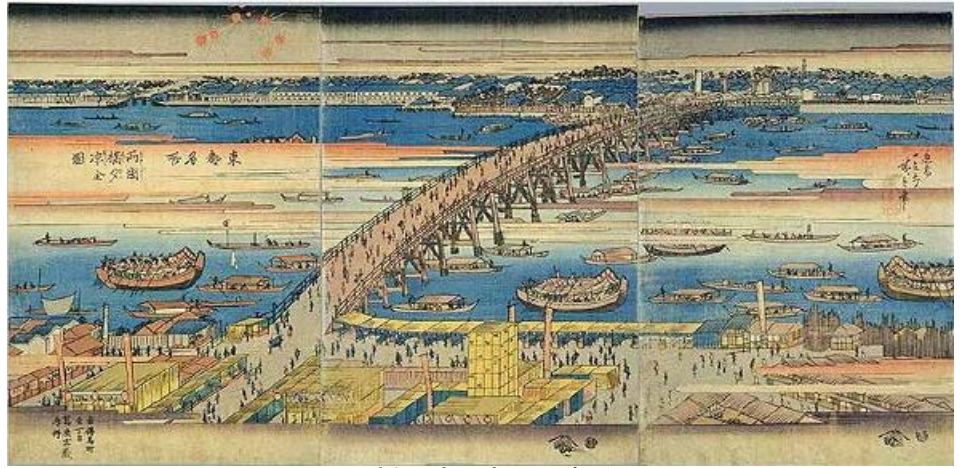
【懇談会における主な議論】

- ・ 水辺というのは決して河川の区域だけではない。水辺というのは水面があって、その外側のまちも含めて「水辺」である。
- ・ かつて水辺は、歴史や文化、経済、情報の発信の場であり、遊興空間や芝居小屋など、まちの中で猥雑さや色気を備えた賑わい空間を形成していた。
- ・ 日本は水害に対して脆弱な国土であるという宿命がある。戦災のがれき処理等により都心における水辺空間が消失した。高度経済成長期を経て、水質の悪化、親水性の消失とともに、都市域の拡張が進み、水辺は機能と効率のみを求める時代の価値観の犠牲になった。
- ・ 河川も水質が良くなり、水辺も注目されるべき時代になってきた。
- ・ 東京の都心の水辺は世界で最も面白い場所でポテンシャルが高い。しかし現時点では、世界で一番自由度が低い。
- ・ 川は文化を際立たせる空間である。日本人は四季や夕日などの時間の変化に敏感で、水辺はこの感受性が磨かれる場である。
- ・ 水辺にたたずみながら眺める水面のゆらぎ、都市の水辺は夜の街灯に照らされるのが良い。水辺のぬけ感が魅力、場の力を感じる。
- ・ 世界の都市では水辺をまちの中心としてとらえているところが非常に多く、公共空間として貴重と言える。海外では水辺が都市の象徴的な存在として魅力を引き立てていることを意識した整備をしている。
- ・ 海外ではスローフードから生まれたスロースィーティー運動が始まっており、都市の時間には先を急ぐ時間とゆっくり流れる時間の2つがあり、水辺はその後者の都市の中でゆっくりとたたずみながらそれを感じることができる貴重な空間である。
- ・ 散策、ピクニック、ジョギング、サイクリング、ボートなど気持ちよくなれる場所として、とてつもなく大きな財産がある。
- ・ 水辺は生物多様性の宝庫であり、人間の利便性の追求だけでなく、生態系への配慮も必要である。
- ・ 日本の水辺は歴史・文化が詰まっており、自然も多様である。地域ごとに特色があり、世界に誇れるものであるはずだ。

I. ヒントフレーズ

○江戸時代の水辺

隅田川の両国橋のたもとに見世物小屋が立ち並んでいる。かつての水辺には賑わいがあった。



両国橋夕涼み全図（広重）

○明治時代の水辺

永井荷風は「日和下駄（1915年）」にて、東京の散策を「淫祠」、「樹」、「地図」、「寺」、「水附渡船」、「路地」、「閑地」、「崖」、「坂」、「夕日附富士眺望」の10の切り口で書いており、当時の水辺については、「水附渡船」の章にて、「水は江戸時代より継続して今日においても東京の美観を保つ最も貴重なる要素」「東京市中の散歩において、今日なお比較的興味あるものはやはり水流れ船動き橋かかる処の景色である」と記している。



永井荷風

○高度経済成長期の水辺

➤ 水質の悪化

1961年当時の隅田川（東京）は、“川というよりドブのようだ”、“メタンガスの泡がポコポコと音をたてて浮かび上がっていた”という状況となった。



隅田川

➤ 効率性を優先した河川整備

効率的な治水整備により、三面張にされた河川。建物も河川から背を向けた（神田川）。



神田川

○近年の水辺におけるアクティビティ

近年では、ジョギングやサイクリングを始め、都市で働くサラリーマンや OL がアフターファイブに水辺に出て楽しめる E ボートクルージング、一風変わった立って乗るサーフボード (SUP)、開放感がありまちや水辺と人々が近づくのに非常に有効なピクニックなど、都会的センスにあふれた水辺利用も見られるようになった。



ピクニック (若洲海浜公園)

※ピクニック：水辺でのピクニックは、開放感があり、誰でも自分たちなりの工夫が凝らせるので、まちや水辺と人々が近づくのに非常に良いツールと考えられる。あまり使いこなされていない水辺という公共空間でピクニックをすることにより、水辺と人との距離を近づけることができる。



E ボートクルーズ (隅田川)

※E ボート：10人乗りのゴム製手漕ぎカヌー。「E」は誰でも (everybody) 簡単に (easy) 楽しむ (enjoy) 等の意味をもつ。空気を抜くことで折りたたんでコンパクトにすることができる。



SUP (サップ) (土佐堀川)

※SUP (サップ)：Stand Up PaddleあるいはStand Up Paddleboardの略。ボードに立ってパドルで漕ぐ水上スポーツ。元々はサーフィンから始まったが、平水面をクルーズしたり、フィッシングを楽しんだりすることが可能ということで近年注目を浴びている。

(2) 河川空間は公共空間なのに自由に使えない？

日本の河川空間は公共空間であるのに自由に使えないという経験を持った人がたくさんいる。また、そもそも近づこうともしない人もいるようだ。自分たちの手で水辺のまちづくりに関わり、まちに対する誇りと自由度の高い空間を取り戻そう。

【懇談会における主な議論】

- ・ 河川空間は公共空間なのに自由に使えないし、使おうともしない。みんなの気持ちや体質がそうになってしまっている。
- ・ 日本の水辺も基本的には公共空間であるが、日本では「みんなのもの」となった瞬間に「自分のもの」でなくなってしまう、結局「誰のものでもなくなってしまう」というところがある。
- ・ 「まち」の中の「水辺」であって、その「まち」の価値を高めるために「水辺」をどう使っていくかというところは、「まち」の人に本当は考えてもらわなければならない。
- ・ 市民がまちづくりに関わることで、都市に受け入れられているという意識が生まれ、まちに対する誇りが醸成される。
- ・ 自分の手で「住んでみたい」と思えるまちにする。公共空間で都市に「受け入れられている」という実感が重要である。
- ・ 水辺開発でまちの人たちとお付き合いをしているが、まちの人たちの水辺への強い思いを感じる。川とのつながりを意識し続けたい。
- ・ 点と点を繋げて線や面にしていく積極的な評価軸が水辺をみんなで作っていく上で重要。点は場であったり人でもあったり、水辺とまちの繋がりが物理的だけでなく、感覚的な繋がりからも形成されることを認識すべき。
- ・ 河川の規制緩和（河川敷地占用許可準則の改定）は進んでいるものの一般に浸透していない。
- ・ 日本の歴史を考えると水辺が一番自由度があった。今またルールを作りながら自由度の高い空間にしていくことが重要だ。
- ・ 地域の財産・宝石は何か？「気づき」の視点が大切である。それを地域特性に応じて磨き上げることで地域ブランドが形成される。
- ・ 道路、鉄道ばかり利用しているので、そこに川があっても見えないし見えていない。「知らない」ことから「気づく」ことが大事。

○シビックプライドとは

市民が都市に対してもつ誇りのこと。郷土愛とは異なり、自分はこの都市を構成する一員でここをより良い場所にするために関わっている、という当事者意識を伴う。シビックプライドは、近代都市が勃興し急激な人口集中が進んだ 19 世紀イギリスにおいて、新たな市民が都市の一員と感ぜられるために、そして都市間競争の中で各都市が個性を誇るために、重要視された概念である。

近年の地方分権化と都市再生の流れの中で再び着目されており、1997 年から英国首相を務めたトニー・ブレア氏は、19 世紀の都市で整備された公共建築や公共空間を市民が誇りに思っていたことに触れ、『私たちが公共建築を建てる時にはそうしたシビックプライドの感覚に立ち戻りたい』と述べている。



トニー・ブレア 英国第 73 代首相
(by World Economic Forum, cc-by-sa-2.0)

○世界の都市：水辺をまちの中心として捉えている

➤ パリ（パリ・プラージュ）

「パリ・プラージュ」とは、“パリの砂浜”という意味でパリのセーヌ川に砂を敷き、気軽に海岸気分を味わってもらおうという企画である。夏のバカンスシーズン（約 1 ヶ月）にセーヌ川河畔の高速道路の通行を止め、人工的なビーチを造成し市民に開放している。フランスの都市の住民は、毎年夏、特に 8 月になると、海辺や地方に避暑する慣習があったが、パリ中心部は観光客で多くなるため、多くの住民がパリに残ることを余儀なくされていた。このパリ・プラージュの企画は、暑苦しい市内に取り残された問題を解消するための避暑地として、パリ市長のベルトラン・ドラノエにより 2002 年からはじめられている。



パリ・プラージュ
(cc-by-sa-3.0)

➤ ニューヨーク（ジョギング）

ニューヨークではジョギングをする人が多い。マンハッタンは東をイースト・リバー、西をハドソン・リバーという二つの川に囲まれているが、その川沿いのウォーターフロントはグリーンウェイと呼ばれる公園としてジョギングやサイクリング、インライン・スケートができるように整備されており、人気がある。

ニューヨークでの川沿いのジョギング風景



I. ヒントフレーズ

➤ リヨン（光の祭典）

毎年12月8日に、世界各地からアーティストが光のアート作品を展示し、水辺を含むリヨンの美しい街並みがライトアップされる。ライトアップは毎年400万人の観光客がフランス内外から訪れ、現在ではリヨンが世界に誇る産業にもなっている。



リヨン市内



ローヌ川

I. ヒントフレーズ

○市民が水辺の未来に興味をもつための工夫

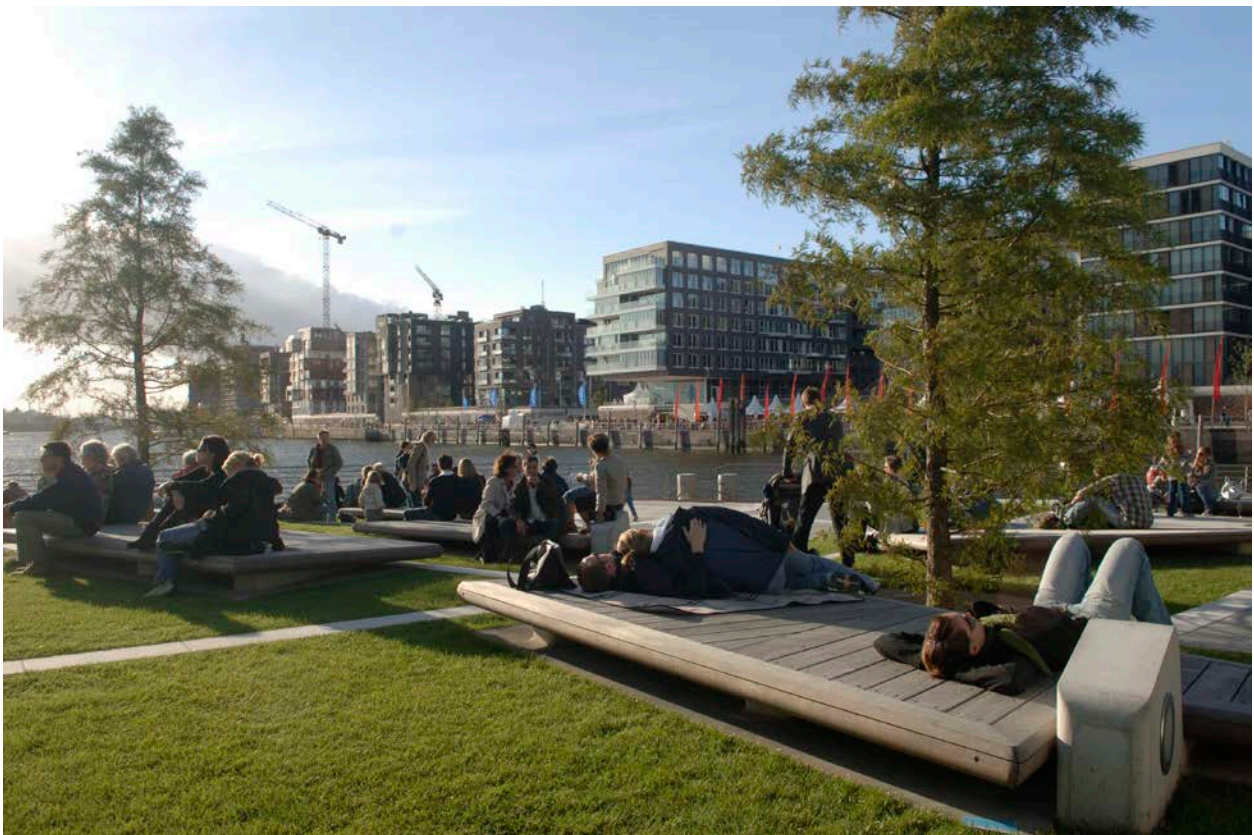
ドイツでは市民に工事現場を見せるということが多くなされている。エルベ河沿いの旧関税地区の都市開発の現場では、工事現場を見る塔、工事現場を見学するクルーズということをやっている。「水辺とまちの関係をいかにつくっていくのか」ということを土木工事を実施している段階から市民に届けようとしている。公共空間を先に整備してテラスと呼び、工事中から開発されていくまちを眺めることができる。



工事現場を見る塔



工事現場を見学するクルーズ



テラスを先に整備し、工事中から開発されていくまちを眺める

(3) 水辺を使い倒して、楽しみ倒す

水辺にはわくわく感があり、楽しみもビジネスも眠っている。「とんでもないこと」と思って尻込みするのではなく、とにかく使い倒して、楽しみ倒そう。

【懇談会における主な議論】

- 水辺にはワクワク感があり、発見行為がある。使い倒して、楽しみ倒すことが重要である。
- 水辺が楽しいというのは、河川の周辺のまちを使いこなすのが楽しいということである。
- 生活を見ることが楽しい、見える設計が大事。
- 東京の水辺は、イベントや舟運などソフト面はよくなってきたが、これまでまちづくりや河川に関する事業部局はあまり積極的ではなかった。また、大阪と異なり、民間企業があまり参加しなかったことが問題だった。
- 大阪の取組みの発端は、東京への対抗意識という面もあるが、当時の、都会を元気にしなければ日本はよくなるという流れに乗ろう、という経済界と行政のメリットが一致した。
- この懇談会で水辺の可能性を改めて感じた。大阪に比べて東京は遅れている感がある。
- 近年、水辺の利用形態が多様化し、様々な工夫・取組が拡大している。また、水辺を利用したビジネスも始動している。
- 水辺は行き止まり感があり、それを打破するのは舟運である。そこから次のところへ行くことができる。
- 諸外国では船が通勤手段など日常生活にとけ込んでいる。また、船には移動手段以上に別の機能があり、ミシェル・フーコーは「ヘトロピア（日常の延長線上にあるが日常から切り離された理想郷）」の例として船を挙げている。時には人と人をつなげるコミュニケーションツールの役目も果たす。オリンピックを契機に舟運・水運の見直しがきっかけになるとよい。
- アートやクリエイティブ性との相性が良いという点では、水辺を使いこなす上で、「常識を疑う」ということと「個人にフォーカスする」ということがポイントになるだろう。
- 水辺では「都市の水辺に新しい水上経験をつくる」「川に背を向けているまちを川に向ける。川を表側にする。」「水辺の使いこなしをイベントという形で、継続的に、毎日の日常化につなげる。」「水上ホテル、劇場、パフォーマーの結集など、様々な活動を水辺で実現して、規制緩和の嵐を吹かせたい。」など、様々な活動、取組みがなされ、企画されている。
- 「作業スペース」、「展示スペース」、「交流するためのバー」、「船着場」の4つがあれば、世界中からユニークな人が集まってくる。
- 水辺にしか無い価値を考えると、賑わいをつくる事、ビジネスが成り立つ事、可能性は色々あるはずだ。
- ノウハウ、知識、実績の共有が必要で、成功事例も失敗事例も次につなげることが大切である。

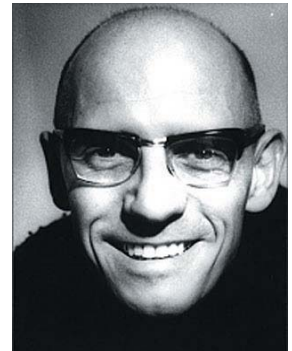
I. ヒントフレーズ

- ・ 思ったことをどんどんアピール、同時に実行、事を起こすことが重要で、結果は後から着いてくる。「とんでもないこと」と思って尻込みしたら何も進まない。「水辺は自由に利用できないはず」という固定観念を払拭することが重要だ。

○船

➤ ヘテロトピア

フランス哲学者のミシェル・フーコー（1926年-1984年）は、「日常の延長線上にあるが、日常から切り離された理想郷」として、「ヘテロトピア（Heterotopia）」という概念を提唱した。ヘテロトピアの例として、博物館、図書館、学校、病院、テーマパークなどとともに、船を挙げている。



ミシェル・フーコー

➤ イーストリバーフェリー

ニューヨークのブルックリンとミッドタウンの間に2011年より運航。交通の便の悪いところを結び、20分おきの運航、プラス1ドルで自転車持ち込み可能、船着場から無料シャトルバス運航などもあり、通勤に利用されている。運航によって不動産価値が上がるといった効果も生み出している。片道4ドル。

A screenshot of the NY Waterway's East River Ferry website. The header features the logo and navigation links: "Ferry Info", "Buy Tickets", "News & Events", "About Us", and "Charters". The main content area includes a headline "Relax. We'll Get You There." followed by a description of the service. Below this is a "Ferry Schedule" section with a "VIEW SCHEDULE" button. A large image shows two people sitting at a table on a waterfront. At the bottom, there is a promotional banner with the text "Just Chill. You Deserve It." and "Coffee in DUMBO? Brunch in Williamsburg? A cocktail in Greenpoint? Dinner in L.I.C.? No problem."

イーストリバーフェリーHP

○新しい水上経験

一般社団法人ポート・ピープル・アソシエーションは都市に新しい水上経験をつくることをテーマに様々な水上イベント等に関する活動をしている。東京の水辺は、歴史的な産業遺産がたくさん残っていたり、高速道路の下を探検できたり、人々の日常生活もかいま見られたり、世界で最も面白い場所であり、船に乗って川からまちを見ることはとても楽しい。



神田アイランドクルーズ



東京低地クルーズ

また、特に新しい取り組みとして、SUP（サップ：Stand Up Paddle）がある。ウォータースポーツの一つで、サーフボードの上に立ち、オール（パドル）を使って漕ぐ。同法人では、SUP はすごくハードルが低く、誰でもすぐに乗ることができ、これまでのボートなどとは異なり船好き、川好きでない「一般の人」が活動を始めているため、すごくポテンシャルがあると考えている。



大岡川（横浜市）でのSUPの風景

また、東京で大地震が発生し陸上交通が完全に麻痺した場合の救助や救援物資運搬の水上交通の可能性について、「B0 菜（ボーサイ）」という東京湾の各地から食材を船で運び、都心の水辺で朝市を開催するというイベントを実施した。船着場がない箇所では、橋から野菜の受渡しを行った。



B0菜：野菜の積込（左）と船着場の無い場所での受渡し（右）

I. ヒントフレーズ

○水辺のカフェ

河川敷地占用許可準則の緩和を受けて、各地の水辺でオープンカフェや川床式テラスの設置などの取組が始まっている。



水辺のオープンカフェ（左：京橋川（広島市）、右：堀川（名古屋市））



水辺のオープンカフェ（左：隅田川（東京都）、右：北浜テラス（大阪市））

○イベント（水都大阪フェス）

➤ コンセプト

水辺を中心としたまちの賑わいは、多様な人々が「水辺を楽しみ」「水辺を使いこなし」、また、「水辺に誇りと愛着を持つ」ことで実現される。このことから、フェス全体のコンセプトを右記のように設定した。

フェスの3つのコンセプト

①水辺での楽しみを分かち合う

②都市の水辺の魅力を使いこなす

③水辺を中心としたまちに誇りと愛着を持つ

➤ 被災者支援“ウェディング応援プロジェクト”

大阪の美容業界（美容室、メーカー、ディーラー、メディア）を中心とした「ウェディング応援プロジェクト実行委員会」により企画され水都大阪 2011 で実施された東日本大震災の被災者支援事業。震災で挙式できなかった方、中止した方などを対象に募集し、3組の被災者カップルの挙式を実施した。人前式として多くの人たちに囲まれ、盛大に祝福を受けて敢行された。



水辺で被災者支援結婚式（中之島公園）

➤ ラバー・ダック

オランダの芸術家、フロレンティン・ホフマンが制作した、アヒルのおもちゃ（ラバー・ダック）を巨大化したオブジェ（パブリックアート）。ラバー・ダックは年齢や人種に関係なく、子供のころの記憶や、思い出を思い起こさせ、幸せや喜びの象徴でもある、とされる。水都大阪 2009 の際に、八軒家浜に設置され、大きな話題を呼んだ。



ラバー・ダック（大川）

I. ヒントフレーズ

➤ 金チヌ

大阪・淀川の河川敷を主な活動場所として、落ちているゴミや漂流物などを使い様々な作品を制作するアートユニット「淀川テクニック」が、水都大阪 2009 で発表したアート作品。



淀川と大阪湾のゴミで作った「金チヌ」(中之島公園)

➤ 水辺ピクニック

水辺の良さや都市の魅力を感じてもらおうピクニック。アートや音楽、子どもから大人までが楽しめるワークショップなどを経験し、ピクニックエリアでフードやドリンクを片手にのんびりしてもらおうなど、それぞれの楽しみ方で過ごすことができるような場を設けた。年々ピクニックを楽しむ人が増え、フェスの期間以外でも水辺でピクニックを楽しむ人の輪が広がっている。



都市の水辺の楽しみを広げる「水辺ピクニック」(中之島公園)

➤ GREEN to CLEAN

大阪のモノ作りに携わる中小企業をクリエイティブな視点で支援する「独立行政法人中小企業基盤整備機構近畿」によるプロジェクトユニットである「ナニワザ」が、水都大阪 2012 で発表したプロジェクト。川の中にグリーンに見立てた船を浮かべ、ゴルフボールを打ちこみホールインワンを狙おうという参加型作品。ゴルフボールは水質浄化を促進するバクテリアが入った特殊なゴルフボールで、川ポチャしたら、川の底でバクテリアが活動をしはじめ、川の汚れを分解して少しずつ水がキレイになっていく仕組みである。川の水質改善を願い、川を舞台に池ポチャゴルフを楽しんでもらうことを通じて河川環境について考えてもらう機会をつくることを目指して実施され、多くの参加者、ギャラリーでにぎわった。



水質浄化“ゴルフボール”を打ち込むイベント

➤ 四十七人のオバチャーン

大阪の若いクリエイターを中心に結成された「プロジェクトオバチャーン」によって水都大阪 2012 で発表されたアート作品。コンセプトは「最強のオバチャーン四十七人が絡んで来るコミュニケーションアート」とし、現代アート史上でも稀にみる「向こうから絡んで来るアート」を展開。街の人々に執拗にからむ「おせっかい」をしながら持ち前のオバチャーンパワーで元気を与えるという作品。連日メディアや府民からの注目を集めた。



四十七人のオバチャーンと記念撮影

I. ヒントフレーズ

○砂浜美術館（Tシャツアート展）

ハコモノじゃない美術館。何が良かったって、作品も全部公募で参加型だから、子どもが作品応募したら必ずファミリーでやってくる。で、歩いて探して自分の家族の作品の前で写真を撮って海で遊んで帰る。そして思い出が残る、というイベント。

「私たちの町には美術館はありません。美しい砂浜が美術館です。」（ホームページより）



砂浜美術館（高知県黒潮町）

○下町の路地裏ガーデニング

墨田区名物のゲリラガーデニング。これが名物で、観光客はみんなおもしろがる。外国人もおもしろがる。そこには必ずおばあちゃんがセットについており、「きれいね」と言うとずっと話してくれる。おもてなししてくれる。もしも川沿いでやったら、みんなこうやって世話してくれるし、色んなコミュニケーションが生まれるかもしれない。



下町の道路に広がる緑（墨田区）

(4) 地域固有の歴史・文化を活かしつつ、クリエイティブに再生する

水辺を再生するには、大規模開発よりも既存の施設をリノベーションすることが有利である。海外で多く見られるように、アーティストやクリエイター、先見性のある企業などが活躍すべき場所である。

【懇談会における主な議論】

- かつての日本の水辺では、舟運、観光資源、商取引の場であり、様々な経済活動が行われていた。
- 海外では、水辺にアーティスト、クリエイターに加え、先を見るビジョンを持っている企業などが集まり、経済活動とクリエイティブ性・アート性が一体となった空間を形成している。また、ニューヨークでは、イーストリバーにフェリーが運航することにより不動産価値があがっているという例もある。
- 既存の建築物が立ち並ぶ水辺の再構築には、キャッシュフローを向上させる水辺のリノベーションがポイントになる。
- 水辺の産業遺産である大きな倉庫や造船所などが美術館やレストランにリノベーションされている例もある。
- この懇談会の会場の、隅田川沿いの MIRROR ビルも神田川沿いのマーチエキュートも川側に閉じていたものを開いただけでこんなにも変わったことは素晴らしい。
- 既存の建物の方が、新しい建物よりも広々としており、クリエイティブな利用が可能である。アーティストやクリエイターが躍動できる場を与えてみるのがポイントである。また、経済的にもその方が優位である。
- 経済論理というのは、大企業の経済論理になっている場合が多いが、同じことを行っても、中小企業であれば経済的に成り立つこともある。現在の「リノベーションの時代」には、小回りがきく方が適合しやすい。
- 大規模開発であれば大企業で十分対応可能であるが、大規模な商業施設やマンションだけでは“猥雑さ”といった面白味に欠けるという面もある。
- 息苦しい都市から放たれる場を求めて、水辺の水上経験を行おうとする変人（ユニークな人々）を受け入れるだけの寛容性が必要。この人たちが都市にどれだけいるかが都市の競争力にも繋がる。
- 地域固有の歴史・文化（日本らしさ）を活かしつつ、クリエイティブ性やアート性を備えた新たな情報発信地として再生（水辺のリノベーション）し、ブランド化しよう。

I. ヒントフレーズ

○水辺のリノベーション

これまでは人々の川や海に対する認識があまりなく、水辺沿いの建物でも、窓は採光や換気程度の小さなもので、水辺の開放感をうまく活用している事例は少なかった。近年、河川の既存の倉庫などの建物をリノベーションし、飲食店や商業施設として新たな空間を創造している例がある。みんなが見過ぎてきた、あるいは使えないと思っていた水辺には、ものすごくとてつもない社会としての財産がある。



隅田川沿いの倉庫を飲食店に（シエロイリオ：左_改装前、右_改装後）



神田川沿いの旧駅、博物館跡を商業施設に（マーチエキュート神田万世橋：左_改装前、右_改装後）

※シエロイリオ：隅田川沿い、蔵前的大型カフェレストラン。「シエロイリオ」はスペイン語で、日本語では「空と川」という意味。元倉庫部分をリノベーションし、壁一面の窓からは隅田川と東京スカイツリーを眺める事ができる。

※マーチエキュート神田万世橋：神田川沿い、秋葉原の商業施設。かつて中央線中央線神田～御茶ノ水間にあった100年以上前の建造物「万世橋駅」（1912～43年）を再利用して飲食店、雑貨店などが入った商業施設をオープン。レンガづくりの長細い建物が印象的で神田川沿いにオープンデッキが配されている。

I. ヒントフレーズ



東京港の運河に放置されていたバージ船（物資運搬船）を改装し、運河に浮かぶ異次元空間バーとしてプロデュース。



大阪道頓堀川 湊町リバープレイス（左_改装前、右_改装後）

※湊町リバープレイス：大阪市の都市構造再編プロジェクト「ルネッサなんば」のウォーターフロントゾーンとして、旧国鉄湊町駅（現 JR 難波駅）の貨物ヤード跡地に開発され、2002 年に開業した。道頓堀川を航行する遊覧船が使用する湊町船着場に接している。川の両岸には、ストリートダンスや散策など、多くの若者が水辺でくつろぐ姿が定着している。

(5) 自分たちで水辺を楽しむ礼儀作法をつくる

なんでもありで水辺を無秩序に利用するだけでは、行政との競合は解消しない。最低限のルール、礼儀作法が必要であり、その作法を利用者自ら考えるという自己責任の文化の確立が必要である。

【懇談会における主な議論】

- ・ ヨーロッパでは、市民のものとしての公共空間の整備が進められ、同時に、市民が「他人事（ひとごと）」ではなく「自分たちごと」として公共空間を楽しむ作法が市民に届けられている。この二つがないと公共空間は、どんどん商業ベースになってしまい、どんどん汚くなっていく。
- ・ 我が国では、行政は「管理する」という意識が強く、また市民は「法に守られている」という意識が強いため、市民が自分たちで個別に作法やルールをつくって楽しんだり実行したりする機会が少ない。
- ・ ピクニックは開放感があって楽しいことに加え、社交の場のコミュニケーションの中から、新しい発見があったり、ごく自然にその場所への愛着が湧いたり、作法が身に着く。
- ・ 例えば、あるスキー場では「指定エリア以外も自由に滑ってよい、そのかわりレスキュー代は自己負担」という自己責任の概念をはっきり導入したところ、海外から人が殺到し、大変な賑わいとなっている。
- ・ 市民や利用者側も、行政管理にまかせっきりで陳情ばかりしている状況が変わり、水辺を利用する側の「自己責任」の文化が確立されると、公共空間のあり方（施設のつくり方、使い方の自由度など）も変わるはずだ。

○市民が“自分たち事”として公共空間を楽しむ工夫

ヨーロッパでは、公共空間の工事現場を公開することで、「水辺とまちの関係をいかにつくっていくのか」ということを土木工事を行っている最中から市民に届けようとしている。従来の工事現場の周りを取り囲み見えないようにし、突如出来上がるという方法よりも、工事の進捗や過程を見て「楽しむ」ことで、市民側にまちづくりに参加しているような意識が芽生え、シビックプライドの醸成や事業の合意形成、まちづくりへの参加意識の高まりの効果が期待できる。



ハーフェンシティ（ドイツ）

○水辺のピクニックで公共空間を自分たちの手に取り戻す

東京ピクニッククラブ※では、社交の場としての都市の公共空間や緑地の利用可能性を追求している。水辺でのピクニックは、開放感があってその都市らしい景観が眺められ、また誰でも自分たちなりの工夫が凝らせるので、まちや水辺と人々が近づくのに非常に良いツールと考えられる。あまり使いこなされていなかった水辺という公共空間でピクニックで使いこなしていくことにより、水辺を自分たちの場所として認識していくことができる。



旧岩淵水門公園
（写真：鈴木豊/東京ピクニッククラブ）

※東京ピクニッククラブ：2002年にピクニック生誕200年を記念して結成。メンバーは建築家、都市計画研究者、ランドスケープアーキテクト、フードコーディネーター、イラストレーター、写真家、グラフィックデザイナー、編集者など。ピクニックの原形を歴史に探りつつ、多彩なクリエイターのコラボレーションによって、自由で洗練された現代のピクニックの姿を提案する。都市居住者の基本的権利として「ピクニック・ライト」を主張し、社交の場としての公共空間のクリエイティブな利用可能性を追求する。国内外の都市でプロジェクトを展開。

(6) 水辺の利用者、地域住民、行政をつなぐコーディネーターが必要

利用者の思いと行政の管理との間に競合があり、その調整に膨大なエネルギーが消費され、あきらめてしまいがち。また、地元の一部の反対により実現できない場合もある。かつてのテキ屋のように利用者、地域住民、行政をつなぐコーディネーターが必要である。

【懇談会における主な議論】

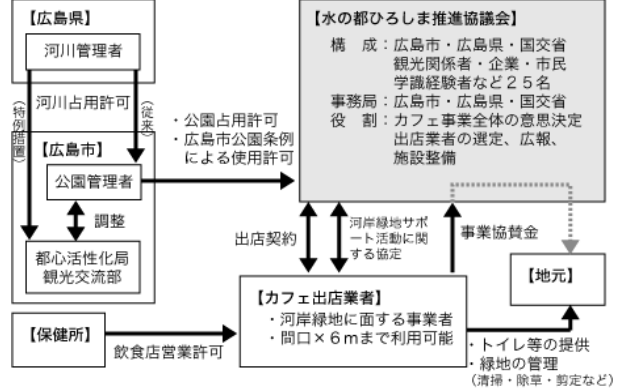
- ・ かつては、地元有力者やテキ屋が、水辺に関わる様々な利害の対立を水面下で調整する役割を担っていたことにより地域の秩序が維持されていた。一方、現在では、河川法が利害調整の一部を担うようになったことなどにより、水辺の利用者、地域住民、河川管理者を含む行政の間でギャップが発生している。
- ・ 水辺利用者の「なぜダメなのか」という思いと、行政の「事故が起きたらどうするのか」、「この人だけに許可してもよいのか」という思いの競合がある。
- ・ 「横にあるマンションのたった一人がNOというとな実現できない」というように、イベントや商業で水辺を利用したい側と地域住民との間にもギャップが存在する。社会全体の福祉の増進、地域の活性化のために、場合によっては、個人のエゴを捨てるための意識改革が必要だ。
- ・ 行政側もやりたいというエネルギーがある人と協力して継続的にやりたいと考えている。例えば水都大阪のように、昔は行政のみで進めていたものが、民間の提案を取り入れる仕組みに変わってきた例もある。包括的に調整できる民間の占有者が入ることの一つの手である。
- ・ 一定の水辺を利用する作法を確立した上で、自由利用を確保するため、利用者、地域住民、行政の各主体の隙間を通訳する「水辺のコーディネーター」が必要だ。
- ・ コーディネーターは誰が担うべきか。キーパーソン、キーカンパニー、キービルディング、熱意があれば誰でもよい。

○地域との合意形成

➤ 京橋川オープンカフェ（広島市）

広島市では、地元に対しては、実施候補地の決定後に説明を行い、理解を求める形となった。当時は先行事例がなく計画のイメージを住民に伝えにくいというえ、マスコミに「屋台」を設置すると報道されたこともあり、一部の住民からは、設置による地域の環境悪化を懸念され、根強い反対を受けた。このため、オープンカフェ設置エリアの縮小、営業時間の短縮、出店者の営業マナーの評価、不法駐車・駐輪対策等を行うことについて協議会と地元とで調整し、地域の合意を図った。

URL:<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/0000000000000/1297929083493/>

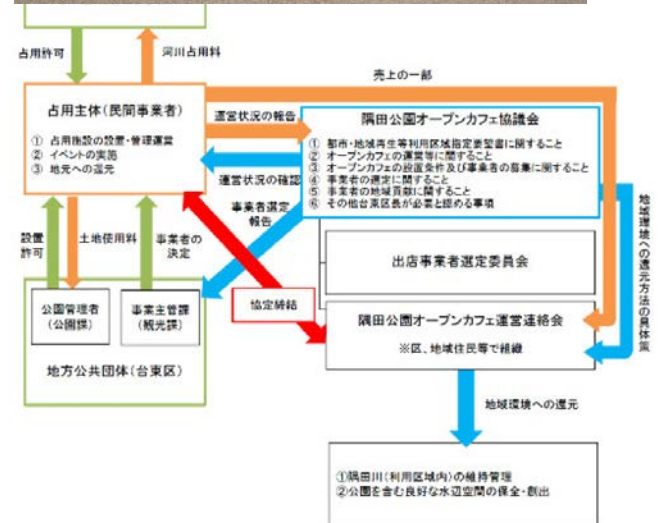


※カフェ出店業者は「公開空地」「通り抜け通路」「公共トイレ」のいずれかを民有地内に設け、地域に提供する。
 ※事業協賛金は推進協議会が地域に再投資する。
 ※カフェ経営は出店業者の独立採算

京橋川オープンカフェ事業スキーム

➤ 隅田川オープンカフェ（東京都台東区）

台東区では、現オープンカフェの実施前に近傍でオープンカフェモデル事業を実施し、利用者の好意的な反応が多かったものの、地元説明会では近隣住民より、「眺望が妨げられる」「ゴミが散乱する」などの意見が出された。その後1年以上に渡る意見交換会の結果、住民による自主的な検討会も組織され、協議会への要望書が提出された。それを受け、学識経験者、地元住民、商店街、税理士、区議会議員、河川管理者、台東区による「隅田公園オープンカフェ協議会」を設置し、地域の合意形成を図った。協議会では8ヶ月で合計8回の会議を実施し、近隣住民からの要望を十分に踏まえて、オープンカフェ事業者の募集・選定を行い、開業後は、協議会の下部組織となる運営連絡会が、事業者及び地元とともに地域活性化に向けた活動を行っている。



隅田川オープンカフェ事業スキーム

「隅田川等における新たな水辺整備のあり方」

URL:http://www.kensetsu.metro.tokyo.jp/kasen/mizube_arikata/index.html

I. ヒントフレーズ

○行政主導から民間主体へ

大阪府市の共通戦略である「大阪都市魅力創造戦略」における重点取り組みの一つとして、水と光の魅力で世界の都市間競争に打ち勝つ「水と光の首都大阪」の実現に向け、平成 25 年度から、新たな推進体制を構築している。水と光の取り組みの基本方針を一体的に審議する「水と光のまちづくり推進会議」のもと、民主導の事業推進組織「水都大阪パートナーズ」と、その活動を支える「水都大阪オーソリティ」を設置し、更にパートナーズを人的・物的に支援する経済界と共に、世界に発信する都市魅力創出に取り組んでいる。パートナーズは民間から公募・選定され、オーソリティは行政の一元的な窓口を目的とした府市合同の組織である。

水都大阪 URL: <http://www.osaka-info.jp/suito/jp/>

	推進体制（H25年度～）	備考
決定機関	<p>水と光のまちづくり推進会議</p> <p>構成員 大阪府知事、大阪市長、大阪商工会議所会頭 関西経済連合会会長、関西経済同友会代表幹事 大阪府都市魅力戦略推進会議会長</p> <p>→ 推進会議の設置</p> <p>アドバイザーボード(専門助言機関) 企業家、学識経験者、ジャーナリスト</p> <p>基本方針の提示 事業評価の実施 等</p> <p>助言等を実施</p>	<p>◇水と光のまちづくりに関する取り組みの基本方針の策定</p> <p>◇水都大阪パートナーズの運営者の選定</p> <p>◇水都大阪パートナーズの事業の支援、事業評価</p>
執行機関	<p>水都大阪パートナーズ</p> <p>国内外の豊富なビジネス経験を有する方や、水都大阪2009以降、常に水都大阪の取り組みに携わっている方など、多岐にわたるノウハウ・経験を有する斬新な運営メンバーで構成</p> <p>【事業内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新たなシンボル空間創造、エリアマネジメントの推進（BID手法の活用等） ・水辺の賑わいづくり(水都フェス等)・社会実験の推進 ・水と光の首都大阪のブランドイメージ発信 <p>※水都大阪パートナーズ：H25公募により選定した民間組織 複数年（4年）の運営を前提としているが、実績評価は毎年実施する。</p> <p>府・市・経済界が一体となり 取り組みを支援</p>	<p>◇民主導の水都事業推進組織</p> <p>◇プロ人材が運営に参画</p> <p>◇収益事業も積極的に展開（自ら稼ぐ）</p> <p>◇評価システムを導入（PDCAの徹底）</p> <p>◇基本的な人、モノ、資金は、府・市・経済界が支援</p>
行政・経済界の 関わり方	<p>＜行政＞ 水と光のまちづくり支援本部（水都大阪オーソリティ）を設置（H25） ⇒ 水辺空間の活用に関する行政の一元的な窓口（府市合同の事務局）</p> <p>＜経済界＞ 水都大阪パートナーズに対し人的・物的支援を展開（H25実績 2人配置）</p>	<p>◇水と光に関わる民間活動を府・市・経済界が強力的に支援</p>

水都大阪 推進体制

(7) 行政は公平、公正、中立の姿勢は重要であるが、新しい提案を受け入れたりする度量をもつ

行政サイドの公平、公正、中立の姿勢は重要であるが、時代の要請にさらに柔軟に対応していくためには、利用者の意見をよく聞き、共に考える姿勢が求められている。また、縦割り行政の弊害により水辺とまちが分断されていたり、中央と地方（現場）の感覚にズレもあったりする。

【懇談会における主な議論】

- ・ 水辺は都市、公園、下水道、道路と河川、港湾など様々な分野の行政が関わることであり、縦割り行政の結果分断されているところも多い。
- ・ 水辺や河川が都市の中の施設として認識が無いことが問題で、どうすべきか議論すべき。
- ・ 水辺を活用したいという想いややる気のある人が、どこに相談に行ったら良いのかさえわからない。
- ・ 役所は「担当が分からない」、「前例がない」の2つを常套句として受け付けないことが多いため、水辺で何かやりたいときの「水辺110番(コンシェルジュサービス)」が欲しい。
- ・ 行政内ではある部署で先進的な取組ができそうな流れになっても、別の部署の反対によって実現しないことがある。実際に具体的な取組を実施する段になっても、どの部署が何の経費を負担すべきかなどで進まなくなることもある。
- ・ 先進的な取組を成功させた自治体では、行政内に横断的なプロジェクトチームを作って、総合調整を担った例もある。
- ・ 同一の分野においても、中央における発想・方針と現場事務所の実際の管理における感覚とにずれがある。
- ・ 日本では、「安全第一」「まちを洪水から守る」というのは絶対的な命題だが、貴重なオープンスペースでもあり、「守りながら、けれどもうまく活用できる形式」ということで、スーパー堤防や水位低下の河川などの例がある。
- ・ 行政は、これまでの取り組みや仕事の誇りを市民にキッチリと伝える必要がある。その上で、「絶対に譲れない（管理が必要な）ところ」と、「創造力があれば（利用の際に）自由度があるところ」を分けて管理することが大切である。
- ・ 市民による水辺を楽しむ作法の浸透度合いや社会的モラルの成熟度等によっては、河川管理者は自由度に対する許容レベルを下げるのが可能となるはずである。
- ・ 新たなものを前向きに支援する度量や、受け入れやすさを確保するための窓口の設置など、自己責任で使いこなすことを応援することが必要である。
- ・ 行政（河川管理者等）はプレーヤーの一人として、地域ブランドを育てていくことも重要な役割である。加えて、河川やまちづくりに関する多様な情報を持っており、水辺のリノベーションには欠かせない存在と言える。
- ・ 河川以外の公園や道路、都市、建築でも規制緩和はできていない。また、河川以外の周りのことも一緒になってやり、大きな行政目的を河川行政も担うという土壌を創らないと、管理的な問題は解決しない。その意味で交流人事という仕組みも有効である。

(8) 持続可能性を担保する資金調達や規制緩和のしくみ

持続可能性を担保するためには、資金調達や規制緩和についてさらに工夫していく必要がある。占用料や使用料の有効活用方策、クラウドファンディング、ファンドレイジングなどの新たな仕組みを検討してみよう。

【懇談会における主な議論】

- ・ 厳しい財政のなかで、都市の水辺での賑わい創出には、民間参入と民間による社会貢献など持続可能な仕組みづくりが必要である。
- ・ 河川の占用料や使用料を維持管理や地域貢献に活用できるようにすることを検討する必要がある。
- ・ 水辺の経済活動を盛んにするためには、キャッシュフローの確保が必要である。再生エネルギーの全量買取制度の導入で、誰も見向きがしなかった土地ほどメガソーラーの土地に適するという一方で突然キャッシュフローが生み出された例もあるが、やり方によっては無から有が生まれる。
- ・ キャッシュフローの仕組みが生まれないと儲かる仕組みにならない。河川の占用料を管理に使うなども一つの手段。良い規制緩和と規制をかけることを使い分けるのが重要。
- ・ 水辺の利活用で利益を生むことができれば、イベント時の保険の仕組みや一体的なプロモーションも可能になる。水都大阪では、それを牽引する規制緩和を含めた概念や BID などのオペレーションを提案している。
- ・ 行政任せではなく、市民や民間などがベンチ等の施設を寄贈するなど、クラウドファンディングの可能性も模索していくと良いだろう。
- ・ 市民にとっては、お金を使わないでファンドレイジングしながら面白いことをやる、ということも重要になってくる。
- ・ 水辺を美しくするためには、用地買収して事業化するばかりではなく、「借景補助金（助成金）」的なものを導入することも考えられる。
- ・ いいものを作っても水辺に人が来なかったらだめで、地元の元気な人と、よそ者、若者、ばか者が1～2割くらいの人が水辺に大集合するような仕組みを水辺で作るとよい。

I. ヒントフレーズ

○河川の占用料

河川敷を占用して使用する際には、占有者が許可を受け、占用料を支払って使用している。

広島市の京橋川・元安川では、「水の都ひろしま推進協議会」（有識者、市民団体等、経済・観光業者、行政で構成）が、河川敷の一括占用許可を受けている。その上で、カフェ出店希望者から使用料を徴収して貸し出す仕組みを作っており、この使用料の一部は、緑地の管理やイベントの運営に利用されている。

○クラウドファンディング

クラウドファンディング（英語：crowd funding）とは、ある目的、志などのため不特定多数の人から資金を集める行為、またそのためのネットサービスのこと。群衆（crowd）と資金調達（funding）を組み合わせた造語

○ファンドレイジング

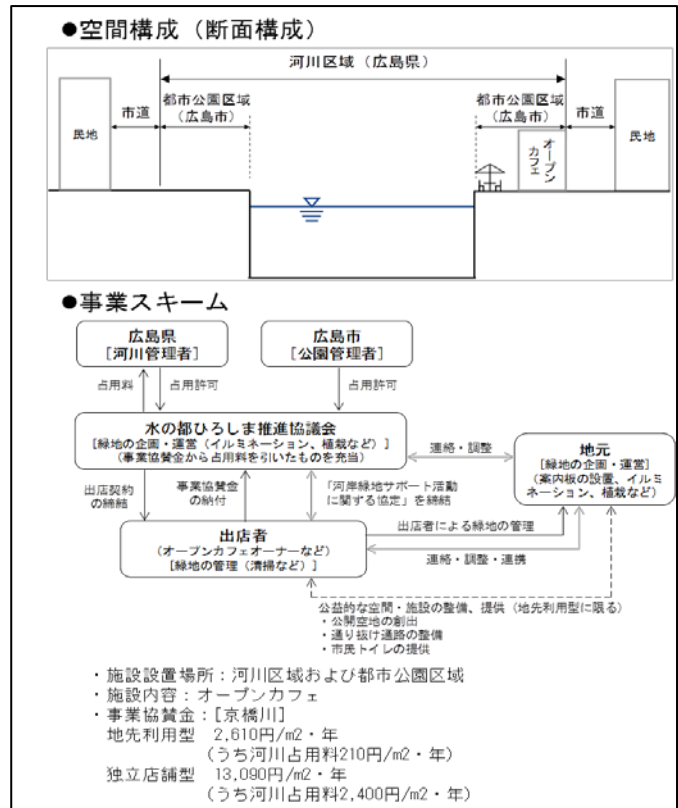
ファンドレイジング（Fundraising）とは、民間非営利団体（Non-Profit Organizations：日本では公益法人、特定非営利活動法人、大学法人、社会福祉法人などを含む）が、活動のための資金を個人、法人、政府などから集める行為の総称。主に民間非営利組織の資金集めについて使われる用語であるが、投資家や民間企業に関連する資金集めに使われる場合もある。

○OBID

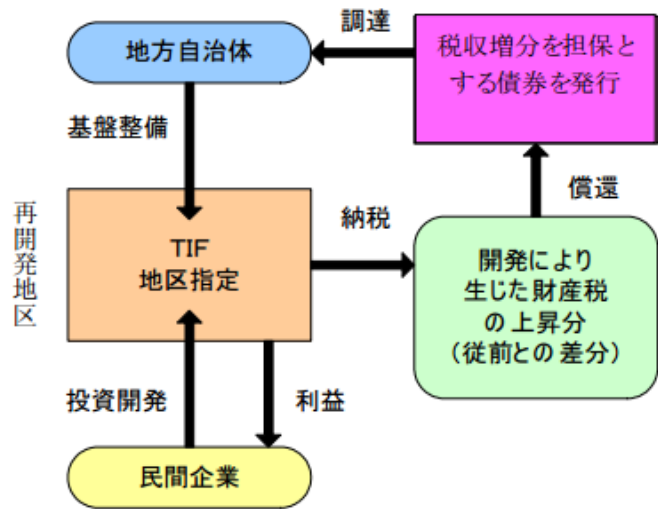
Business Improvement Districtの略。アメリカの主にビジネス地域において資産所有者、事業者が地域の発展を目指して必要が事業を行うための組織化と財源調達の仕組み。

○OTIF

Tax Increment Financingの略。固定資産税等の増収増を担保とする債券を発行することで、都市整備の開発利益を必要な基盤整備費に還元する資金調達法。



占用料と使用料の仕組みの例（広島市）



TIFの仕組み

(9) 未来の水辺に向かってつなげる、育てる

日々目にしているものと記憶をつなげてアプローチすることは共感を得るための重要な視点である。同じ思いを持つものがつながり協働することが大切であり、利用者自らが水辺をつくり、使い、育てることが重要である。

【懇談会における主な議論】

- ・ 多くの市民の共感を得るには、日々目にしているものと記憶とをどのようにつなげてアプローチしていくかということを念頭に、まちづくり・水辺づくりの計画をいつ、どのように、どうやって地域に伝えていくかが重要である。人に伝えるときには、モデル事業がすごく重要である。
- ・ 単独で考えていても、利害対立者も含めて人とのつながりがなければ、いいものも進まない。
- ・ ひとつのきっかけがあれば、多くのクリエイティブな人達が関係を持てる。色々な人達が出会い、水辺とその周辺地域と連動するような仕組みづくりが必要である。
- ・ 行政からの上から目線だと市民は絶対反応しない。「助けて」、「力を貸して」と言うと、みんな反応する。
- ・ エリアマネジメントを推進していくということと、地元住民・利用者・企業・河川管理者など地域全体で、その水辺をどうしていくのかのビジョン・コンセプトを共有することが重要である。
- ・ 公共の仕組みでは公平、平等が前提となるが、事業者の仕組みでは採算性が重要であり、公平、平等が前提とはならない。
- ・ 昭和の震災復興の頃は、水辺においてもマスタープランがあった。行政が大きなグランドビジョンを示し、イニシアチブを取ることも必要。

○民間主導による交流・情報発信

平成 25 年秋から、水辺に関心の高い方たちが、水辺の将来について語り合いながら交流、連携を深める「東京リバーサイドライフドリンクス」が開催されている。水辺におけるビジネスチャンスの発掘や、水辺文化の発信源となっていくことが期待される。



第 1 回 平成 25 年 9 月 26 日
(会場：シエロイリオ (隅田川沿い))



第 2 回 平成 25 年 12 月 4 日
(会場：ニホンバシイチノイチノイチ (日本橋川沿い))

(10) 水辺の使い方に対する共感と実践を広げていくためのプロモーションの方法

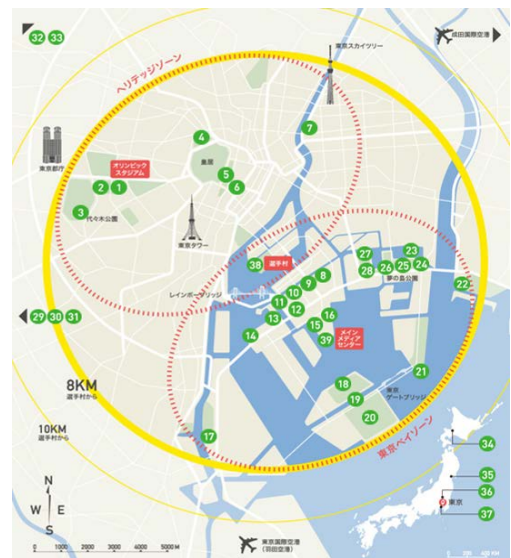
都市の資産としての水辺の使い方を市民・行政ともに広げていくためには、よりよい使い方、理想的なあり方を広く周知する必要がある。それがひいては、「日本ならではの」水辺の利用を促し、都市ごとのブランド認知にも寄与することとなる。

【懇談会における主な議論】

- ・ これからは不特定多数の「誰か」ではなく、個人の行動や個人の思いなど、「個人」の視点が大切となり、それを伝えるところにメディアやコーディネーターの役割がある。
- ・ 一般市民にもわかりやすい水辺活動のプロモーションにより、仕組みづくりや行動のきっかけが生み出せる。
- ・ 水辺は散策などの日常的空間と観光などの非日常的空間の2つの側面があり、後者は外からの人にとどのようにアピールするかなどが重要になる。
- ・ 都市の国際競争力を高めるひとつの要因に、水辺利用のセンスもあると言える。そのために、アートやデザインなどのクリエイティビティを活かした使い方が大切である。
- ・ 2020年のオリンピックは、水辺の景観や賑わいづくり、舟運の復活などに着目して取り組む良い契機である。
- ・ 水辺の未来を造る人が集い、共に動き出す。市民・企業・行政の三位一体となった取り組みが重要である。
- ・ 我が国の水辺とまちをもっと輝かせるために、「かたる」「つなぐ」「ためす」「つくる」「そだてる」というコンセプトのもと、水辺とまちと人をつなぐ輪を広げていこう。

○2020年の東京オリンピックは最初の大きなターゲット

2020年のオリンピックでは、臨海部に選手村やメディアセンター、多数の競技会場が配置される予定である。ロンドンオリンピックでは、テムズ川に五輪シンボルマークを浮かべる、ベッカム選手が高速ボートで聖火を運ぶなど、テムズ川が注目を浴びた。同様に、東京を代表する河川、隅田川にふさわしい景観を形成するとともに、観客やプレス関係者を舟運により運ぶ、恒常的なにぎわいを創出するなどの施策を進める最初の大きなターゲットである。



東京オリンピックの競技会場配置（案）